を統制する中心でありつつ自らは何にも統制されない絶対的な主体としている。ただし「性光」は日常、動揺しやすい心におしる抑制されている。そこで「目光」によって「性光」を見つめ、動揺を排除し、安定させる。だが、「性光」が真に主体となるためには、「目光」の観想の対象として客体でありつつけてはならない。「目光」という個人的意識は、宇宙的意識である「性光」を見つめる立場から、「性光」が照らすものをもとに見る立場へと方向転換するのである。『金華宗旨』は「目光」がそのまま宇宙的意識であるとはせず、「目光」が「性光」と同化する段階を重大な転機とみなす。『金華宗旨』は、個人の意識と宇宙的意識との隔たりを乗り越え、自己の意識を宇宙的意識に同化させることこそが内丹の最大の要点であると示そうとしたのである。

平田国学における体験的幽冥研究の展開

宇野功一

題名中の「体験的幽冥研究」という語は、より精確には「幽頭往還体験研究」である。

平田篤胤は『靈能真柱』において、幽冥を基本的には死後の世界であり、国津神や妖怪変化も住み、大国主命が主宰していると説いた。さらに幽冥は頭世（現世）と重なってはいるが生者の目には見えないと説いた。周知のように篤胤は同書におい

て、服部中庸の『三大考』の内容に記紀以下の古典の記述などを適宜加味し、思弁的に自己の幽冥論を論じた。

同書刊行後、篤胤は文献以外の情報も用いて自己の幽冥論を補強しようとした。まず、幼少期から常陸岩間山中の山人（天狗）の下で修行したという少年寅吉に会って聞き取り調査を行い『仙境異聞』にまとめた。次に、前世と死後の世界と胎児期を記憶しているという少年勝五郎に会って『勝五郎再生記聞』にまとめた。また伝手を辿って薩摩藩士八田知紀にある調査を依頼した。八田はその依頼により、山の神の使いに招かれてたびたび霧島山中の異界に入って女神に仕えたという善五郎に会って話を聞き、『幽郷真語』にまとめ、篤胤に送った。篤胤は幽頭往還事例について、体験者本人（生きている人間）を情報提供者として聞き取り調査を行うという手法で自身の幽冥論の妥当性を確認しようとしたといえる。先学の指摘どおり、寅吉はおそらく修験者のもとでシャーマニズム的な修行を積み、脱魂状態で異界訪問の幻覚を体験したのである。勝五郎の話は転生譚で、善五郎の話は隠れ里（谷川健一氏の推測では当地の秘密宗教カヤカベ教の村）訪問譚といえる。三者の語る世界は異なるものに思えるが、篤胤はいずれも幽冥の一面を示すものと考えた。右三書の成立後、篤胤の門人の一部は幽頭往還事例を師の手法に倣って調査し記録した。

しかしこれとはやや異なる手法を採った門人もいた。筑前の神職宮崎大門である。彼は篤胤のもとで数年間国学を学び、帰郷した。彼はもともと悪霊祓いの術に優れていたが、悪霊のほとんども動物霊で、人間の死霊や神が憑くのは稀であると記し

第13部会

ている。ところが帰郷後、近隣の村で憑き物騒ぎがあつてこれを祓いに行つたさい、その憑き物を本人の主張どおりに数百年前この地で自害した武士の霊であると認め、その前世、死後の世界の様相、死霊の日常について数日間に渡つて克明な質疑応答を行い、『幽魂問答鈔』にまとめた。同書には宮崎の行つた除霊法、審神者としての質問、御霊封じの法、石碑を建立して神として祀ることなど、死霊への対処が詳細に記されている。

調査者が、幽冥から頭世を訪れたとされる鬼神（ここでは人間の死霊）を情報提供者として聞き取り調査を行う、という手法を宮崎は採つたわけである。彼はそのさい、除霊法という、鬼神と直接交流する技法を用いた。彼の除霊法は伝統的かつ受動的な種類の霊術にすぎなかったが（調査者が自ら、脱魂して異界を訪れたり鬼神を頭世に招いたりする能動的なものではないので）、篤胤の幽冥論の検討という明確な目的にそつて霊術を転用した点で、この調査は重要である。

しかし幽魂往還体験が平田派内で本格的に研究されたとはい難い。思想的には以下の問題があつたからである。一、右の記録類の内容と記紀以下の古典の記述との矛盾をどのように解消するのか。二、篤胤のいう幽冥は範囲が広すぎる。右の記録類に描かれた幽冥は雑多で、世界間の関係も鬼神間の関係も明瞭でない。それらをどのように整合させるのか。三、情報提供者の語りの信頼性と調査者の記述の信頼性をどのように確認するのか。四、調査者が幽魂往還体験者に巡り会えるか否かはほとんど偶然による。霊術を幽冥の研究に用いようにも、管見のかぎり文化年間から明治初期に至るまで能動的な霊術は平田

派内には存在しなかつた。結局これらの問題は、明治初期に平田派国学者が政府から一掃されたのち、篤胤の幽冥論の影響を受けた神道家の一部によって解決が目指されていった。

排仏論の根拠としての海外情報

——平田篤胤の事例を中心に——

森 和也

大航海時代はヨーロッパに世界地理の知識の拡大をもたらした。その知識は南蛮人の到来によって海外情報として日本にも伝播し、キリスト教禁教以降も継続して流入し続け、日本人の世界観の発展に大きな影響を与えた。それは単に日本人の世界地理の知識を拡大させるだけでなく、須弥山世界説に基づきインド・中国・日本で完結していた三国世界観の崩壊を引き起こした。この崩壊はそれぞれにインドという地域、中国という地域に対して、価値の相対化をもたらすものであった。

しかし、海外情報をもたらしたものは、インドの世界地図上に占める価値の相対化だけではなかつた。近世日本において、倫理的観点あるいは経済的観点、宇宙論的観点などから排仏論がさまざまに展開されたが、イスラーム国家ムガル帝国の侵略による伝統的なバラモン・ヒンドゥー・インドの衰退と、それにもなう仏教の祖地インドでの仏教の衰微という新しい海外情報が、仏教に対する評価を引き下げる上で、有効な材料となり、「地理的」観点からと呼び得る排仏論が存在した。